進路指導　第81巻第4号（夏季号）　平成20年6月1日発行

参考資料4－3

08年【夏季号】

進路指導

CAREER DEVELOPMENT GUIDANCE

特集

「キャリア教育の実践」

(1) 広島県大竹市立小方小学校……教　諭　中間 寛子
(2) 栃木県栃木市立栃木西中学校……教　諭　山中　亮
(3) 神奈川県立田奈高等学校……教　諭　吉田 美穂
(4) 東京都立王子工業高等学校……副校長　中村　彰

特別企画

座談会
**「学校教育の現状と
これからのキャリア教育の推進の在り方を語る」**

特別寄稿
「新学習指導要領について」

日本進路指導協会
日本キャリア教育学会
全国中学校進路指導連絡協議会／全国高等学校進路指導協議会

キャリア教育の実践　キャリア教育推進地域指定事業などの実践報告

特集

重層的キャリア教育を目指して

～地域・体験・リスク回避～

夏季号

神奈川県立田奈高等学校　教諭　吉田　美穂

1　地域と結ぶ職場見学体験

2006年夏，田奈高校１年生220名は，地域の事業所での見学体験に参加した。美容院，ソフトウェア会社，建築内装会社，日本料理店，ペットショップ，保育園，消防署，証券会社など，多様な業種の地元の事業所が協力してくれた。小・中学校と比べ，必ずしも地域との距離が近いとは言えない高校，とくに普通科としては，めずらしい全員参加の地域での職場体験プログラムである。初年度の成功を受け，2007年度は，18業種53事業所の協力を得て，事業はさらに発展してきている。

キャリア教育で脚光を浴びるようになった職場体験学習では，協力事業所の確保が実現に向けて困難な壁として立ちはだかることが多い。限られた教職員が通常の授業や学校行事，部活などをこなしながら，協力事業所を開拓することは不可能に近い。先進地域でも，自治体単位での事業所のリストアップやPTAの協力による事業所開拓が続けられている。田奈高校は，この点を地域の法人会やロータリークラブと連携することで乗り越えることができた。

横浜市の緑区・青葉区・都筑区の法人企業を会員とする法人会は，田奈高校への支援を地域貢献活動と位置づけてくださった。また，横浜田園ロータリークラブは，高校周辺に居住する会員も多く，地域の課題として田奈高校の発展向上を考えてくださっていた。そこに連携の生まれる素地があったといえる。法人会やロータリークラブという事業所の集まる組織をとおして協力を依頼することで，事業所の開拓は大きく前進した。とりわけ，会員企業数も多く，専従の事務局体制を持つ緑法人会には，「この分野の事業所を希望する生徒が多いが事業所が不足している」という情報を伝えると，個別に会員企業に働きかけてくださり，協働して開拓してくださった。

こうして受け入れが決定した事業所と学校の間では，数度にわたる情報交換が行われる。

まず，事業所から，事業所の概要（所在地・業務内容・HP・交通などの情報），担当者，予定する見学内容・体験内容，体験に際しての学校への要望などを記入してい

ただく「受け入れカード」を提出していただく。この際，電話でも内容確認を行う。事業所によっては，細かな指示や要望がある。例えば，幼稚園からは，ピアスやネックレスなどのアクセサリーは保育の安全のため絶対禁止，保護者の目があるので，華美な髪色は避ける，などが出されることが多い。また，持ち物・服装なども事業所などによって大きく異なる。制服着用から，動きやすいラフな服装で運動靴必須まである。

さらに，体験に入る前には，事業所担当者を対象とした事前説明会を開き，この職場見学体験事業についての学校としての姿勢やねらい，事業所の方々へのお願いなどをお伝えし，懇談の場を持つ。田奈高校は，さまざまな支援を必要としている生徒が多く通っている学校である。学校としては，本校の生徒状況を率直に伝え，学校とともにこの子たちをともに育てていただきたいとお願いしている。生徒にとっては，親や教師以外で初めて接する大人であり，そこできちんと扱われ認められることは，大きな自信となり，ひいては社会への信頼につながっていく。

生徒に対しては，事前学習として，緑法人会の協力も得た専門講師によるマナー研修，体験事業所の一部の方々に来校いただいての職業インタビューも実施している。

こうした準備を経て，夏休みに生徒たちは体験に出ていく。多くの事業所が「地域の高校生のために」と多忙な業務の傍ら，プログラムを用意して，親身に受け入れてくださった。生徒たちの７割は，「楽しかった」「やりがいがあった」「社会を知ることができた」などの肯定的な評価を与えている。自由記述でも，「コミュニケーションの大切さを学んだ」「あいさつを欠かさず日頃から心がける大切さを感じた」「任された仕事の重さややり遂げた達成感を感じた」「日頃の言葉づかいと丁寧な言葉づかいの違いを知った」「服装ひとつで相手の印象が変わることを学んだ」「日常の生活のなかで味わえない気分を感じられた」「いろんな人からのあいさつやアドバイスがうれしかった」「人の目に映らない部品を作っている人たちがいるからこそ機械は働き，人のためになるのだと学びました」「事務の仕事はささいな間違いで信頼を失ってしまう，１つ１つのことを大切に取り扱わなければならない，大きな会社でも小さな会社でも１つ１つの大切さは変わらない，そんな風に思えた一日でした」などの声が並んだ。

９月には，生徒の書いたお礼状を持って事業所を回り，アンケートをお願いする。アンケートでは，多くの事業所が「受け入れてよかった」と回答してくださり，よかった点として，「社員教育の一環になった」「社会的使命を果たせた」「新卒採用の判断基準を設けることができた」「初心に返って頑張ろうとパワーをもらえた」「高校生の仕事に対する考えを知ることができた」などをあげてくださった。

10月には，事業所と学校側の意見交換会を開き，生徒や事業所のアンケート結果をふまえて，事業の成果や課題を確認している。2007年度の意見交換会では，つぎのような事例も共有された。授業時間になかなか教室に入ろうとしない，授業中取り組もうとしないなど学校生活上の課題を抱えて

いる女子生徒がいた。この生徒は希望してエステサロンに実習に行ったのだが，開始時には遅刻するなど心配な姿勢が見られた。しかし，サロンでの実習が始まると，人が変わったように2時間立ち通しの実習にも真剣に参加し，その姿勢はすでにスタッフになったかのようですばらしかったとエステサロンの指導担当者から大変ほめられた。この分野の仕事がしたいという希望が芽生えた生徒は，担任によると，9月以降，高校卒業を目指して授業姿勢にも改善がみられるようになった。このように，個々の生徒の具体的な変化を，職場の方と学校教員がともに語ることができると，準備から総括まで負担の多い体験学習であるが，やってよかったと心から思える。

2　「総合」を基礎とした展開

田奈高校は，現在，神奈川県の指定を受け，キャリア教育を学校教育の柱のひとつとした新しいしくみによる地域運営学校（2009年度本格実施）を目指している。それに先立ち，1997年度には，1年次1単位，2年次1単位の2単位の独自科目として「進路研究」が設定されている。2年次の内容は，実質的に「情報処理」であったが，1年次「進路研究」には，独自テキストが作成された。その内容は，自分自身をみつめ，職業についての知識を広げて，将来について考えるもので，テキストを使った通常の授業を基本に，職場見学や卒業生講話，社会人講話などの行事が組み込まれていた。普通科高校でありながら，1997年という早い時期から進路について考えさせる独自科目を設定した背景には，進路をめぐる厳しい環境がある。卒業生に占める「未定・その他」の割合が，1996年度で33.3%に達していたのである。「進学準備」が別項目で立てられているため，この「未定・その他」には，いわゆる「浪人」は含まれない。したがって，3人に1人の卒業生が「フリーター的存在」として，社会に出ていくことになる。

その後，「進路研究」は，2003年度以降「総合的な学習の時間」に組み込まれた。そして，2006年度から，体験的な学習の取組みが発展し始めた。「職場見学」は，1997年度の「進路研究」設立当初からプログラムのひとつであったが，1クラス30人単位の工場見学という形態のために，内容的には社会見学と大差なく，また学校生活の延長上の気分のまま集団で移動し，訪問先でも集中できない生徒が多かった。効果が見込めないとして2005年度には一度休止，2006年度からの少人数での職場見学体験の可能性が模索されたのである。この過程で，前述のように法人会やロータリークラブの協力を得ることができ，2006年度からの職場見学体験実施へと展開することとなった。

従来から，総合の授業のなかに「進路研究」があったため，職場見学体験の事前・事後指導を一連の通常授業と有機的に関連させて展開することが可能だったことは，一過性の行事ではない体験づくりにむけて，大変有効であった。

3　体験学習の深化

田奈高校では2007年度から，2年次でも体験学習を積極的に取り入れている。

2年次には，総合が1単位置かれ，半期

午後2時間連続の授業が組まれている。生徒は，10程度の講座から興味関心に合わせて講座を選択し，履修する。このなかに，3～5日のインターンシップまたは専門学校実習を内容とする「校外体験学習」講座を置いたのである。2007年度には，インターンシップに13名，専門学校実習に16名が参加した。

生徒たちは，大変充実した体験をし，事後の評価も極めて高かったため，2008年度は，講座を2つに分け，「インターンシップ」20名，「専門学校実習」30名を募集する予定である。

4 「リスク回避」のキャリア教育

田奈高校では，以上のような体験的な学習に加え，新たなキャリア教育の在り方も模索している。フリーターの権利学習がそのひとつであり，もうひとつは，中央大学の古賀正義教授との連携授業による，「リスク回避」を意識した新しいキャリア教育プログラムの開発である。

従来から，田奈高校の「進路研究」では，働く際の権利についての学習が一定の比重を持って，取り組まれてきていた。当初想定されていたのは正規雇用者の権利だったが，現在の流動的な雇用状況を生き抜くためには，フリーターになってしまったときの権利もはずすことはできない。

現在，多くの高校では「フリーターになってはいけない」という内容の教育がされ始めていると思う。田奈高校でも，フリーターの生涯賃金の少なさ，年齢が上がるほど仕事が減ってしまう現実，生活の見通しが立たず家族を持つのが難しいことなどについて，さまざまなワークを使って理解させるようにしている。しかし，それだけでなく，フリーターの権利をも扱う必要を感じている。

研究者の間では，若者の意識変化と企業の雇用戦略のどちらがよりフリーター増加の主要な要因なのか，この数年議論が続いている。このことは，フリーターに関わる教育を考えるうえで，根本的な問につながる。「キャリア教育をすれば，フリーターは減るのか」。

1980年代から「産業の空洞化」が言われるようになり，高卒の労働現場は次々と海外へ移転，高卒就職の仕事は限られたものになっていった。1990年代後半からは不況のなか「新規学卒就職」が抑制され，「非正規雇用」が大幅に増える一方，スリム化された「正規雇用」においても人材育成の余裕が失われ「長時間・過密労働」が常態化し，結果として高い離職率を招いているといわれる。終身雇用が残る中核的な労働力ではなく，周辺的な労働力として扱われる可能性が高い進路多様校の若者たちは，このような不安定化する雇用状況のなかで生きていかざるを得ない。

フリーターが制度上不利だということをいくら強調しようと，雇用情勢が非正規雇用の増大と正規雇用の過重労働を生み出しているなら，実際に卒業生の一部は確実にフリーターにならざるを得ないだろう。「七五三現象」と言われるが，一度正社員になっても離職する者が半数に上る。それらを考えれば，フリーターになってしまったときに権利をいかに守れるかを知っておくことが，決定的に重要になってくる。

また，学習へのモチベーションを考えても，田奈高校でアルバイトの権利を取り上げる意味は大きい。経済的に厳しい状況にある家庭が多い田奈高校では，アルバイトは届出制であり，2，3年生になるころには生徒の大半がすでにアルバイトを経験しているからである。彼らは，アルバイターとして，すでに働くことにデビューしており，そこでさまざまな体験をしたり，疑問を感じたり，ときにはトラブルに直面したりしている。2006年度，「アルバイト，フリーターの権利を考える」というプリント教材を補助的に使って授業をしたところ，生徒の反応がよかったため，2007年度テキストからは，その内容が組み込まれている。

さらに，2007年度から，取り組んでいるのが，古賀正義教授（中央大学）との連携授業である。

古賀教授は，従来の進路指導は，職業意識の醸成を図って目標を設定し，それを実現するために面接や資格などのスキルを習得するという「目的達成型モデル」であったが，それでは，多様な雇用の在り方や転職が多い現在の職業世界に対応しきれない，とりわけ，進路多様校の場合には「リスク回避的モデル」が必要だと指摘する。田奈高校では，転職やフリーター経験も含めたケース＝先輩の生き方・在り方を理解し考えることをとおして，変化のためのスキルも含め，実際の職業世界に適応するためのスキル形成を促す研究授業を，６月と11月の２回にわたって実施した。

研究授業の内容は，今まで数年間にわたって古賀研究室が継続して収集してきた高校卒業生のその後のライフヒストリーを聞き取ったインタビューデータを基にした，ケーススタディを核として構成されている。等身大の若者の存在とそのキャリア，それについて語る若者自身のことばをできるだけリアルに提示することをとおして，ともすれば不安定になりがちなキャリアをいかに生きていくかを，高校生に考えてもらうことに主眼を置いたプログラムである。

第１回，第２回とも，はじめに，古賀先生から，パワーポイントで映像や音声も使って，できるだけリアリティのある形でケースが紹介された。高校時代アルバイトしていた地元のスーパーで契約社員となり，精肉部門で働く女性のケース。正社員を目指してガソリンスタンドに就職したが，当初の予想と違う仕事の状況に失望し退職，同じガソリンスタンドでアルバイトしながら，趣味のバンドを再開するなどフリーターになっている男性のケース。３年の秋になって偶然そういう選択肢を知り，看護学校に通いながら准看護士として働くことを選択した女性のケース。いずれのケースでも，本人たちの迷いや思いが生の声で紹介された。

その後，生徒たちは，紹介されたケースの先輩の生き方をどう思うか，６人×５グループに分かれてディスカッションを行った。大学院生が各グループにファシリテーターとして入った。ふだんは黙ってしまいがちな生徒たちも，大学院生に上手に話を引き出してもらったようである。生徒たちにとっては，年齢が近い大学院生は，教員よりも親近感を持って向かえる相手であり，また，院生自身が，生徒が話しやすい問いやコミュニケーション・スタイルを意識し

て，場をつくっていた効果もあると考えられる。とりわけ，盛り上がっていたのが，自分たちのアルバイト経験を語り合う部分である。そうした経験を語り合いつつ，将来の仕事やその選択についてもリアリティをもって考えているようだった。事後のアンケートでも「みんなの話がいろいろきけてよかった」と互いの経験や考えをシェアできたことを挙げる生徒は多かった。

このようなケーススタディをとおしたキャリア教育プログラムには，つぎのような可能性が開かれている。（1）身近で等身大のケースについて自分のことばで語り合うことで，生徒の間に，進路について日常的に語り合う関係を築くことができる。（2）多様なキャリア・パスのメリットやデメリットを自分に引きつけて，将来について考える機会をつくることができる。（3）進路についての同世代のさまざまな経験や語り方を知って，それらを自分に役立つ形で利用できる可能性がある（例えば，何を大切に思うかで，いろいろな働き方があって，迷いながらみんな選んでいる／仕事のつらいこともやりすごして気分転換し，乗り越えていく生き方もある／自分なりの楽しみを仕事のなかに見つけて語ることで自分を支えるやり方もある，など）。

この研究授業をとおして，今後について3つの示唆をえることができた。ひとつは，こうした生徒同士のディスカッションに大学生や大学院生に参加してもらうことの有効性である。地域運営学校へ向けて，地域の大学生や大学院生などの人材資源を生かしたプログラムづくりが有効だろうと思われる。2つめは，本校卒業生の経験を生かせないかという点である。今回は，古賀研究室の研究データによるケーススタディだったが，すでに働いている本校卒業生を訪ねて話を聞くなどの形でも，生徒が等身大の経験を知り，将来について考える機会にすることができるのではないかと思われる。3つめは，生徒たちはすでにアルバイトをとおして働く経験をしてきており，新鮮なその体験について語り合いたいという欲求を持っているので，それを生かしたプログラムが有効ではないか，という点である。2008年度には，2年次の総合に「アルバイトから考える」講座を開設する予定である。

5　キャリアカウンセラーとの連携

以上のような取組みに加え，2007年度9月からは，神奈川県商工労働部との連携で，週1回キャリア・カウンセラーが来校している。今後は，個別のフォローも充実させていきたいと考えている。

6　重層的キャリア教育を目指して

十代後半という時期をそれぞれの迷いを抱えながら生きている生徒たちのために，どのような内容を，キャリア教育として用意するのか。

その答えは，ひとつではないと思う。社会や大人への信頼，体験から得る自己肯定感，自分自身の適性を知ること，職業についての知識，働くことへの自分なりのスタンス，できるだけリスクを避ける知恵…。流動的な労働市場のなかで生き延び，それぞれの人生を築くことができるようにするために，キャリア教育には重層的なプログラムが求められていると考える。